

今月の焦点

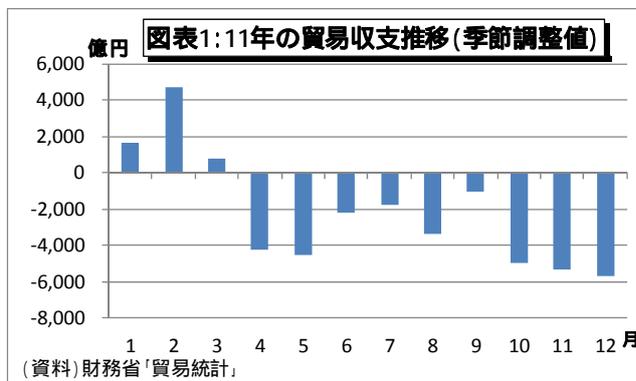
国内経済金融

2011年の貿易収支の動向と12年の見通し

岡山 正雄

はじめに

1月25日に公表された財務省「貿易統計(通関ベース)」によると、12月の貿易収支(季節調整値)は5,676億円と9ヶ月連続で赤字となった(図表1)。原数値でも11年は12ヶ月中7ヶ月が赤字とな

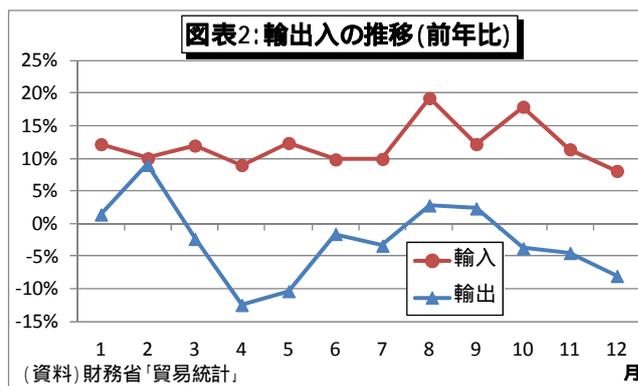


ったため、11年は2兆4,927億円となり、第二次石油危機に見舞われた1980年以来、31年ぶりに暦年で貿易赤字となった。

11年の貿易赤字の背景は、当然、東日本大震災後の輸出減と輸入増によるものが大きい。以下ではその要因を輸出と輸入それぞれについて見たうえで、12年の貿易収支の見通しについて述べたい。

輸出:供給網の寸断と海外要因で減少

前年比伸び率の推移を見ると(図表2)、11年の輸出は1、2月に中国の春



節休暇による特殊要因から、1月に小幅増に留まった後、2月に大幅増になって始まった。その後、東日本大震災が発生すると、生産拠点が被災したことで供給網が寸断されたことから、生産活動が停滞。これにより輸出も前年比10%を超える減少幅が4、5月と続いた。特にそれぞれ輸出の20%前後を占めていた電気機器と輸送用機器では、4月にそれぞれ同12.5%、43.2%と大幅な落ち込みを見せた。

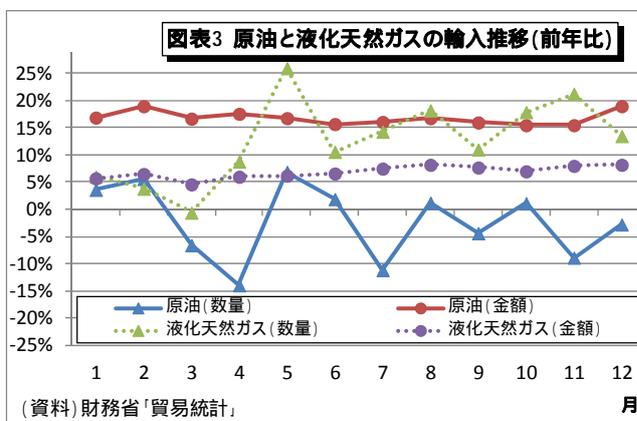
しかし、供給網の回復は当初の見込みよりも堅調に進んだことから、輸出は徐々に回復、8、9月には一時前年比プラスとなり、底堅い推移となった。ただその後は為替相場が1ドル=80円を割り込む歴史的な円高水準で定着したことや、欧州財政問題の深刻化を端緒とした海外経済の減速感、タイでの洪水被害などを要因に輸出が下振れており、直近の12月も前年比8.0%と低い水準に留まっている。

このように11年の輸出減の背景には震災だけではなく、海外要因も少なからずある。

輸入:原油価格上昇と火力シフトで増加

一方、輸入は11年を通して前年比で概ね10%程度の増加幅が続いていた(図表2)。この要因は第一に原油価格の上昇が挙げられる。10年末から中東諸国で続いていた民主化運動は、1月にジャスミン革命へと発展、チュニジアで政権が崩

壊すると、他国へも民主化運動が波及した。このような不安定な中東情勢を受けて、11年初から原油価格は上昇基調となり、5月にはWTI原油価格が一時1バレル=114.57ドルとなった。その後も原油価格が高止まりし続けたため、数量ベースで見ると、原粗油の輸入は前年比横ばい近辺で推移していたが、金額ベースで見ると、前年比15%を超える輸入増加が続くこととなった(図表3)。



第二に電力の火力シフトである。福島第一原発での事故を受けて、発電において原子力から火力へのシフトが発生、これにより4月以降、火力発電所の主力燃料である液化天然ガスの輸入が、一貫して数量ベースで前年比10%を超える急増を続けた。ただし、原油とは異なり液化天然ガスの価格は前年比低下基調だったことから、金額ベースでの輸入額は、火力シフト前後にかかわらず、概ね5~10%の間で推移している。

12年の貿易収支は小幅赤字か

以下、12年の貿易収支を簡便的だが試

図表4: 12年輸出入予想の前提

| | 前提 | 見通し(兆円) |
|------|--|---------|
| 輸出 | 4~7月は10年並、その他は11年並。 | 67.1 |
| 輸入 | 原油は価格が10%下落、数量ベースでは11年並。 液化天然ガスは数量ベースで10%増。 その他の品目は11年並。 | 67.4 |
| 貿易収支 | | 0.3 |

算したい(図表4)。

輸出は重い足取りを見せる米国経済の回復や、欧州財政問題の更なる深刻化、中国などの新興国における景気減速懸念が下振れ要因としてある。ただし、11年4~7月に見られた震災による影響が、12年にはないことから、仮に4~7月を10年並、その他の月を11年並とすれば、12年の輸出総額は67.1兆円(前年比2.4%増)と推定される。

一方輸入は、原油価格の動向と原発の再稼働可否に左右される。このうち原油価格は中東情勢の沈静化を受けて、11年比で10%下落すると仮定する。

また5月には全停止する原発が年内に再稼働されず火力シフトが続くとすると、液化天然ガスの輸入は12年も11年比で10%は増加して推移するだろう。

これらを踏まえたうえで、他の輸入額が11年比横ばいで推移すると仮定すれば、輸入総額は67.4兆円(前年比1.0%増)と推定される。

以上より12年の貿易収支は0.3兆円と貿易赤字になるものの、赤字幅は大きく縮小すると予想する。

まとめ

11年の貿易収支は東日本大震災の影響と原油価格の高止まりが主因となって赤字となったと考えられる。12年はこの要因が剥落し、年後半には貿易も巡航速度に戻ると考えられる。イラン情勢や世界経済の減速感などのリスク要因があるものの、それらのリスクが顕在化しない限りは、貿易赤字が今後定着する懸念は低いだろう。